望鄉

望郷

元満州国裁判官の抑留受刑記

横山光彦著

サイマル出版会

撫順軍事監獄にて（左端・著者）

著者

望　郷　横山光彦著

© Teruhiko Yokoyama
THE SIMUL PRESS, INC. 無断転載を禁ず

(発行所) 株式会社 サイマル出版会
発行人／村松増美　編集人／田村勝夫
東京都港区赤坂1-11-45興和第3ビル(〒107)
電話 (03)582-4221(代)／振替・東京52090番
印刷・製本　凸版印刷株式会社

1973年　Printed in Japan 〈0395－040413－2703〉

望鄉·目次

一戦犯の証言として（まえがき）

〈プロローグ〉過去から出てきた男……一
一六年ぶりの祖国／過去から現在への木戸銭

第一部　満州国の解体——敗戦前後のハルピン

1　崩れ去った無敵関東軍……一三
頼りにならない軍人／敗戦を知る／崩れ去った軍人の秩序

2　消えゆく満州国……二四
始った「日本人の男」狩り／あやうくシベリアへ／屍の山を築く医務室／脱出に成功

3　ソ連占領下の生活……四五
たけのこ生活でしのぐ／同胞を裏切る人びと／保身はかるあさましい姿／秘かに東京放送を聴く

4　逃亡・逮捕・抑留……六一
ついに逮捕される／ソ連政治部将校の取調べ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第二部　希望なき日々 ——ソ連の抑留生活

1　郷愁に涙する……七七

スバスク療養所の生活／楽しい収穫作業／死の三病棟／明るく楽しいドイツ軍歌／郷愁に涙する

2　療養所生活……九六

さびしい臨終／色どりをそえる女性たち／異国の恋／〝二つこぶの駱駝〟

3　失われた「帰国」……一一四

ラクチェンカ療養所へ／「帰国」と間違えた極東移動／またもや重労働／悪名高き七三一部隊／中国に送られる

第三部　裁きの庭に立って ——中国の抑留生活

1　追求される「過去」……一三九

毛主席への嘆願書／中国共産党の宝／認罪運動と罪行調査／日本からの訪問者／瀋陽・撫順の参観

2　元裁判官の裁判……一五九
戦犯裁判に思う／裁判の開始／中国人民への「最終陳述」／寛大な判決
3　罪を憎んで人を憎まず……一七九
中国各地の印象／「人民公社好」／人民公社の問題点／社会主義国の農業
4　釈　放……一九八
社会主義と民族問題／第一次五ヵ年計画の成果／中国共産党の指導力／きびしい食糧事情／期限前釈放命令を受けて
〈エピローグ〉ふるさとに帰る……二二
留守中の家族の生活／一六年ぶりに通貨を手にして／戦後の裁判所を訪ねて

《プロローグ》
過去から出てきた男

私はそのムードが好きだった。船中どこを歩こうがとがめる者はいない。

一九六一年八月二一日午前一〇時塘沽新港を出発した貨客船、ポーランドのヤネク・クラシスキー号の船客は、六日前同時に釈放された私たち三人のほかには、ユネスコ関係者だというポーランド人の老紳士一人だけであった。今は中国側の人はいない。同年八月一五日付中華人民共和国最高人民法院軍事審判廷刑事裁定書がパスポート代りである。

私は一等船室にひとりで、今吉均さんと佐古龍裕さんは、同じく二人で入った。もちろん旅費は私たちを日本に送還する中国持ちである。食事は、テーブルはちがうがいつも船長や事務長と一緒だ。片ことの英語でも身振り手振りを混ぜてけっこう通じる。乗船二日目の朝食の時、船長が、「家族に電報を打ってやるから英文で電文を書きなさい」といって用紙をくれた。

「We have no money」

「No matter」

そこで私たちは船の横浜到着の日時を聞いたうえ、それぞれローマ字で電文案を書いた。私は、「ポーランド汽船ヤネク・クラシスキー号にて八月二五日朝七時横浜着の予定。その日を待つ」と孝子宛に書いて船長に渡した。

その時、船長はアメリカ製のL&Mという煙草を一本ずつくれた。私はすわないのだが珍しいので記念にする。学生時代に松波仁一郎さんの『めくらの垣のぞき』という旅行記を読んだことがあるが、その中に出てくるポーランド人が明朗で親切なので、ソ連旅行中の陰鬱さが一度に吹飛んでしまったというくだりを思い出してなるほどと思った。

事務長も船室係もみな親切だ。船長たちが席を立つと、私たち三人は、出迎えが間に合うかどうか、帰国したらどうして暮すかなどを話合った。私の家族は東京に住んでいるから出迎えに来るだろうが、今吉さんは大分だし、佐古さんは山口だ。中国から貰った百元は、塘沽新港で乗船前に友誼店での買物に全部つかってしまっているので（日本円に両替えするすべもなく、中国側係員の奨めもあった）、迎えに来る者がいなかったらどうするのだろう。帰国してからの話には私は興味がなかった。それよりも事務長が昨夜特に取付けてくれたサロンのラジオ受信機で、日本の放送が聞きたかった。

私はサロンに出てラジオのダイヤルを回した。昨夜は上海や南九州の放送が入ったが、今朝は北九州か四国の放送らしい。小学校生徒の清らかな合唱を聞いて、刻一刻横浜に近づきつつある私の胸は高鳴った。今の合唱は「雲の色」でしたという放送を聞きながらじっと窓外を見つめたが、雲と海が見えるだけで陸地は見えない。一六年振りに、最後に故国を離れてからだと一八年振りに見る、陽に映えた海のうねりが後ろから船を押し進めては追越して行く。

事務長が来て「出国」の手続きをする。それが済むと、航海、船室、食事は快適かどうか、不満足な点はないかを聞かれたので私はブロークンながら、「We are enjoying a delightful and comfortable voyage」と答えたら、私の求めるままに私の手帳に船長と自分の名を書いてくれた。Pienkowski Jadensz master m/s Janeck Krasicki Jaskulski Kasimierz Chief Steward.

いよいよ明日は故国日本だ。横浜に迎えに来てくれる妻子と船のどのあたりで、どんな工合に対面することになるのだろうか。千鶴子は銀行に勤めているというから、もう大きくなっていて抱きあげるわけにはいくまいなどと考えて、私はわくわくしながら朝日のさし込むサロンの中を歩きまわった。

今朝、佐古さんは、「日本に帰っても、たよりにならん息子の世話にならねばならんかと思うとつらいねえ。職業軍人のなれのはてはのたれ死にじゃねえ」と言ったし、今吉さんは、「わしは先輩の会社の守衛にでもしてもらいますかなあ。あんたはどうするつもりですか」と言って私の顔をのぞき込んだ。私は、「どうしますかなあ」とあいまいな返事をして席を立ったが、心の中では判事に復職することに決めていた。

私は抑留一六年を経た今でも復職のできることには疑いをもたなかった。満州国の司法官になる時、日満両国司法部間の復職に関する諒解取決めがあるはずだし、すでに帰国した飯守判事も復職しているし、孝子が中国政府の配慮で撫順の戦犯軍事監獄に面会に来る時持参し、天津で中国政府当局に提出した「戦犯の禁錮刑を日本において代執行することに関する嘆願書」には、最高裁判所人事局で取りまとめた判検事有志の署名があると聞いていたのである。だが

私は撫順の仲間での学習で、「まさかお前は日本に帰ったら旧職場に復職して、再び過去におけると同じような〝罪行〟を繰り返そうというのではないだろうな」としつこく言われたことを思い出して苦笑した。

〝旧社会関係〟を維持することがそんなに罪悪なのだろうか。先に帰国した者は、〝旧社会関係〟をきれいに清算して生活しているのだろうか。皆〝革命家〟になっているのだろうか。撫順で仲間が声を大きくして言っていたように、日本では現在ほんとうに餓死に瀕する者が数十万人もあり、共産主義革命寸前で、私のような旧官僚は上陸すると同時に革命政権側に捕えられ投獄されてしまう。家族と会えるなどとんでもないことなのだろうか。肉親を〝説得〟し、革命陣営に獲得すると壮語して日本に里帰りした一四、五歳の少女が、中国に帰っても日本事情を完全に黙秘しているという「人民日報」の記事は何を物語っているのだろうか。いずれにしても、あと二十数時間経てばすべてははっきりする。そう思って私は船室に帰った。

海のうねりが高くなって、六千余トンのヤネク・クラシスキー号は大きく揺れていた。その夜私は、「お帰りを待つ」という孝子の電報を船室係ボールから受け取った。日本の事情はあまり心配しないでもよさそうだと判断し熟睡した。

一六年ぶりの祖国

明けて二五日はひどい霧だった。船の揺れがまったくない。「おや、入港したのかもしれない」、そう思ったら私の胸は高鳴った。

急いで跳び起き最上甲板に出てみた。波間にただよう木片の動きからみて、船は徐行してい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ることがわかったが、入港間近にちがいない。電信室の上の方に弓なりになったものがくるくる回っている。ちょうどそこにピエンコフスキー船長が出て来たので、「あれは何か」と尋ねると「レーダーだ」と答えた。当時私にはそれが何の用をするものかがわからなかった。

「電報を受け取ったか。お前は一六年振りで東京に帰るんだろう。おめでとう」

ピエンコフスキーは私の手を握った。私は礼を述べた。そして足早に去りかけたピエンコフスキーを引きとめて、「お礼のしようがないのですが、これでも記念にとってくれませんか」そう言って私は、家族から慰問品として送ってもらった、使いなれたパイロット万年筆を差し出した。

「ありがとう」

ピエンコフスキー船長は、その万年筆を両手の指でくるくる回してから胸のポケットにさし込むと、「横浜港だ。うまい水が飲めるぞ」と大声ではしゃぎながらウインクして操舵室に消えた。

霧が幾分うすれて赤いブイが見えたと思ったら、貨物船が左に見え続いて右に見えた。みな停泊している。それを通り過ぎる頃また左に、右に、そしてさらにその左にも、右にも。幾十分徐行しただろう。いやあ、これはたいした船の数だ。これはみな横浜港に貨物を運んで来たのだ。荷揚げが済んだのかどうかわからないが、常時こうだとするとたいした貿易量だろうなあ。舷側にもたれてそんなことを考えていたら、突然大きな音が舳先から聞えた。碇を下ろしたのだ。船はぴたりと停止して、いっさいの音が止んだ。なるほど正七時だった。

私は急いで船室に帰って、上陸の準備を始めた。といっても、荷物は撫順の軍事監獄を出る

ときにもらった鞄一つと風呂敷包み一つだから、いつでも荷造りはできている。私は鞄の中から、面会のとき孝子が持って来てくれた安全かみそりを取り出してひげを剃り、メンソレータムを塗っていたらボールが来て、「事務長がサロンで待っているからすぐ来てくれ」という。さっそくサロンに行ってみると、日本人の役人が三人、ヤスクルスキー事務長と小さな机を囲んで書類をめくっていた。黄色の種痘証明書を持った検疫官が「横山さんですか」と尋ねたので、「そうです」と答える。それだけで船上での手続きを終えたらしく、役人たちは帰って行った。検疫官以外の日本人は水上警察官と上陸管理事務官だったことが、ヤスクルスキー事務長に聞いてわかった。

私は舷側で役人たちの乗ったモーターボートが霧の中に消えるのを見ていたが、落ち着かなかった。停泊中の貨物船が数隻、霧の中で濃淡の墨絵のように見える。レーダーさえ止っている。波打つのは私の心臓だけだろうか。私はサロンに戻ってソファーに仰向けになった。時計を見ると九時半を過ぎていた。

私がうとうとしかけた時、急にがやがや人声がした。はっと気がついた時にはもう四、五〇人の人びとが、今吉さん、佐古さんと挨拶していた。大きな赤旗の文字で中国帰還者連絡会の人びとだということがわかった。会長の藤田茂さん、小山さんたちと挨拶する。つづいて二、三〇人の人びと。顔に見覚えはない。そのうちの一人と目が合った。その人は「ここだ、ここだ」と言いながら駆けよって私の手を握った。松木通世さんだった。

「ご帰国おめでとう。横須賀中、豊島小の同窓会の皆さんだ」

ぐっと込みあげて来た。「ありがとう」と言ったつもりだが声にはならず、目がうるんで誰

の顔も見えない。

「奥さんたちが来てるよ。船室に行って見たまえ」

私はそう言われて、一同と握手し終ると興奮気味で船室に行った。狭い通路が人でいっぱい。それをかきわけ通り抜けて船室に入るまでお互いに気がつかなかったのか、後ろの方で「おとうさんだ」という「浩」と思われる声が聞えた。とたんに船室に穴でもあいたようにどっと人が入って来た。

「おとうさん」と上ずった声で目に涙を浮べながら私の胸に飛び込んで来たのは千鶴子だった。そして孝子、進、浩が……。進、浩、千鶴子と別れたのはそれぞれその一一、九、五歳の時だった。立派に成長したものだ。姉、妹も、義弟も来ている。声もなく夢中で握手していたら孝子が、「おとうさんこの服と着替えて……。その服ではずかしいですよ」と言って、有無をいわせず子供たちと一緒に私の詰襟の中共服を、着馴れない背広服に着替えさせ、ネクタイまで結んでしまった。乏しい中で工面して新調したらしい様子だった。

長男の進に「裁判官方がサロンで待っていらっしゃるそうです」と言われて私はサロンに行った。進が判事と言わないで裁判官と言ったことに私は「戦後」の響きを感じた。サロンは先ほどの人びとで一杯で入りにくかったが、同期生の千種達夫さん、下村三郎さんを見つけると、私は勇気を出して分け入った。下村さんの令嬢も千鶴子のお友達だというので来て下さっていた。横浜地方裁判所の所長前沢忠成さん、飯守重任さん、坂間孝司さんも。公証人の玉井又之烝さんと弁護士になった下尾栄さんも。野間、片山、尾畑さんも。いずれもお世話になった人びと、親しい人びとだ。厚生省と東京都の各民生課の方や、神奈川県知事代理の方も見えて、

お祝いとしてお金らしいものを下さった。

甲板への出口が騒々しくなったと思ったら、新聞社とテレビ局の記者やカメラマンが甲板に出てくれと言っている。霧がはれて陽がまばゆかった。陽当りの良い所で写真を撮られ、やつぎばやの質問を浴びて何やらうっかり喋ってしまった。私は新聞記者を用心していたのだが、何を喋ったのか覚えていない。誰と握手したのやらも覚えていない。もみくちゃにされたような気持でサロンに逃げ帰ったら、そこはすでに静かになっていて、ちょうどつめたい紅茶が出たところだった。

松木通世さんや親戚の者と一緒に喉をうるおした時は蘇生の思いがした。

松木さんの日本埠頭倉庫株式会社の艀舟で上陸し、入国管理事務所で帰国の手続きを済ませた時は午後二時過ぎになっていた。最高裁判所の好意による乗用車で帰る途中、義弟石川悌男さんが用意してくれた鶴見の新三舛でフランス料理に舌鼓を打ち、年老いた母の待つ牛込のわが家に帰ったのは夕暮れであった。

過去から現在への木戸銭

さて、その沿道で皿のように見開いた私の目に映ったものは何であったか。おびただしいきれいな乗用車、物凄く大きなトラックやトラクター、よく舗装された道路、活気溢れる工場、道行く婦人の美しい装い、こぼれるほどに積み、飾ってある多彩な食料品店と衣料店のショーウインドー。だが日本人仲間の学習で聞き飽き、秘かに目に入ることをおそれていた「餓死寸前の人びと」と「革命寸前の日本」の片鱗は遂に発見することができなかった。

目まぐるしかった今日一日を回想して、豊かな祖国の姿に安心するやら、裏切られた「学習」に腹立たしいやら、興奮しながらも、とにもかくにも私はやっと夢に見たわが家に帰り、畳の上に座り涙して喜ぶ母に額いた。そして母が親戚の者と挨拶を始めた次の瞬間には、私は中国帰還者連絡会の会長藤田茂さんが船上で会うなりすぐ言われた次の言葉を、当然のことのように思って口の中で復唱しながら、明後日の予定行動として、最高裁判所の事務総長に帰国の報告をするとともに留守中の数々の配慮に対する礼を述べ復職の手続きをすることにした。

「横山さん、日本では撫順で学習したような工合にしようとしたって駄目です。あんなことをしたら生活どころか生存すらできない。心おきなく復職しなさい。向うには僕からよく日本の情況を伝えておくから」

私は、まだ撫順の軍事監獄に残っている古海忠之さん宛に右のような事情を書いた。古海さんたちの帰国はもう二年先ではあるが、私のような気苦労をしないようにと願ったからである。私はその便りを書きながら、日本から何の遠慮もなく、向うの非現実的な学習の無意味なことを指摘できる自由と喜びをかみしめた。手紙を書き終って寝るとき、孝子から「今日船上で事務長に請求され、孝子宛電信料として五千円を支払った」と聞いた。私は、「それはね、過去から現在に入る木戸銭なんだよ」と言った。そして顔を見合わせて二人は笑った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.